君の御蔭

鷺水

なつかしき吾故里なる豐岡に　こたび尋常小學校新築落成せし
といふを聞きて　うれしさのあまり　うたひ出しがまゝを送りて
二百にあまる愛らしの數へ子どもに分ち給へけるは

（上）

治る御代の三千余
六歳の春を積ねける
頃は彌生の空高き
霞につゝく朝烟
民のかまども豐なる
岡べにたちし學校は
文の林の奥ふかく
わけ入れそめん道しるべ
國の光をいとゝしく
かゝやかさんと敎へ子が
學の海に漕ぎ出る
ともゐなとかん港なり

（下）

君が御蔭にたちそめし
その學びやに光得て
緣いやゆす甲山
ふもとをめぐる寒川も
清き流れの末遠く
沖津島山波たゝで
よる藻かくなるうなゐらも
爪木木の實を拾ふ子も
もれぬ惠みの君が代は
千代に八千代と歌ひつゝ
祝ふ今日こそうれしけれ
祝ふ今日こそ樂しけれ』

（甲山は故里の山にて寒川は故里なる川なりかし）

病める友を思ひて

東くゆ子